

季題觀念の変遷

野中常雄

Tuneo NONAKA

(一) はしがり

季題の問題は現在俳句に於ける最も根本的な問題の一つである。連歌・俳諧に於ては、いつしか発句と季との間に密接な関係が生じ、次第に強固なものとなり、何等の疑問も持たれず明治に及んだ。季題について強い関心を示したのは大須賀乙字が最初であつたといつてもいい。「霜の如き俳論の人今やなし」と惜しまれて、乙字が歿してからでさえ三十余年になるが、季題は今なお解決されてはいない。問題が複雑してくるので、その形式を十七音による場合だけを考へても、現代俳句は有季派・無季容認派・超季派の三つに分類する事が出来る。本題の問題は俳句という名称、ひいてはその存亡にも関する根本の問題でもある。各方面から研究すべきであるが歴史的に研究する事も極めて重要である。主として子規以後について考察を進めたが、紙数の関係で序説ともいふべき部分でとどめる事になつてしまつた。

(二) 季題の意義

「子規以前には四季詞といい、子規は四季の題目という語を用い、子規以後は季題となり、乙字先生に至つて季語といわれたものである」(大森桐明、続俳句講座第六卷)とあるが季題・季語・季感という語は比較的新しい語である。岡崎先生も季題という語は子規以前の文献にはまだ見出されていない。この語の流布したのは子規歿後であろう。子規までの和歌・連歌・俳諧で用いられた季の題・季の詞・季の物などという語から伝統をひいたものであるが、そのどれとも同一意味ではないといひ、又季題と季語との区別位はつけておく方がよく、また季語の有無と季感の有無とは理論的にも實際的にも全く別個のものである事も自覚して然るべきであろう。この頃の文学辞典や歳時記の類はその弁別が不十分のように思われるのであるとも言つておられる。現在では季題・季語両方とも用られて居り、すべての人が弁別していないとうのではないが殆ど同じような意味に用いられているのが現在の実情である。更にこの語の出来た以前の事にも溯つて用いられている。季の題・季の詞等の意味を解明しながら、それらが交錯し変遷して現在に到つたあとを辿りながら、今日用いられている意味に於ける季題觀念の変遷について考へていきたい。

(三) 連歌と季題

わが国では最初は漠然とした不完全な形で春夏秋冬の変化を意識するという程度であつたようであるが中国思想の影響などをうけ、文化が成熟すると共に季節の意識は敏感となつて来た。しかし祝詞や記紀の範囲では日本人の素質が季節に敏感であつたかどうかはわからない。記紀の歌謡など

も自然物を客観的に謡うという事はしないで、比喩として詠んでいるにすぎない。これが万葉時代に入ると季物とか季語とかいうものが成立したという事が出来る。しかしまだ将来の四季の風物現象が文学の一要素として、特定の地位を持つというような傾向はなかつた。それが平安時代の和歌になると四季の部立というものが成立した。これは文学に於ける季節の意識が世界に比類のない所にまで進展する出発点を作つたものという事が出来る。自然の風物、たとえば鶯や梅がこの時代には、単独に思い浮かべられないで、春色と必然的に結びつけられて考えられるようになった。人事的なものに於ては、まだこのような傾向は見られなかつた。更に時代が降ると、月といつて秋の月に通ずるようになり、その景物が最も特色を発揮し、最も愛される時季によつて次第に特殊な季節的連想が結びつけられる傾向も生じて来た。新古今集になると純客観的なうたい方をしたものが多くなつた。そして虫の音・秋風のそよぎから直ちに秋の寂しさを受け容れる程密接に、これらの題材と結びつくようになった。

さて長連歌の形式が、百韻を基本形式として出来上つたのは、鎌倉時代初期であるといわれているが、この頃から季の詞が発句に重要な要素となつていたかどうかはわからない。吾妻問答には阿仏尼が東へ下つた時、発句を所望された時の話が出てくる。それによると早くから連歌の発句は、その季節を違えないのをよいとした事がわかる。連理秘抄（貞和五年の奥書あり）には「発句に時節の景物そむきたるは返す返す口をしき事なりことに覚悟すべし景物のむねとあるがよきなり」とあり、井蛙抄の藤原信実に関する記事によつても連歌の発句には必ず当季を結ぶべきであるとしていた事がわかる。現存する鎌倉末期の長連歌を見ても発句にはすべて当季の景物を詠んでいる。鎌倉時代から発句と当季の景物との関係は十分認められていたことがわかる。

室町時代になると宗祇は吾妻問答の中に、はつきりと発句と季との離るべからざる関係を説いて居り、その後の諸書は全く法則的に発句の無季を戒めている。また巻中の春秋の句は三句から五句まで続けるとかいうような約束も夙くから存して居り、季の制約に関する研究は連歌作法書の重要な部分を占めるようになった。

発句と季とがこうした関係を持つようになった理由を、額原先生は連歌がまじめなものとなつた後も発句にだけは当座の興を専らとする最初の名残が残つていた。しかも既に特殊の場合の即興ではなくなつていたのであるから、いつでも誰にでも興味を感じさせるような題材を別に選ばなければならない。それには先ず何よりも折節にあつた句を詠む事が最上の策でなければならなかつたと言つておられる。こうして一卷を和やかな雰囲気の中に、進行せしめる為の必要から、その時の季節に合うような題材を要求したのであろうが連歌の最盛期に至つては、連歌に於ける季の問題は既に厳然たる法式のもとに置かれ、そうした詩型に完成した形式美を賦与する為の規範となつた。

岡崎先生が考察しておられるように、中世和歌に於ける題というのは、その代表的な完成した状態では主題であつた。季の題はその中で恋や雑の題に対立して、はじめて意味のあるものであつた。連歌・俳諧に於ける季の題というのも、その完全な姿はこの和歌的な主題であり、雑の題に対立したものであつた筈である。しかるに連歌・俳諧では季を季の物・季の詞と解して、題とは別個な素

材と見た。これが季の題を圧倒する事となつて、両者の間に混線を生ずる事となつたのである。連歌では発句はまだ完全に独立してはいなかつたが、発句に於ては季の詞が他の詩的題材を抑圧して全く作品の中に君臨するようになつた。即ち発句は必ず季を持つべきものと考えられ、和歌の季とは異なる境地を開く事となつた。

和歌に於ける季も四季だけでなく、春の中にもまた初中後があるというような考え方の萌芽を含んでいたが、まだ十二月に分けて季の物を配置するという程にはなつていなかった。連歌では連理秘抄や白髪集では十二月の制がとられ、季節の分別は精細になつた。従つて季に属する物の選定も極めて豊富になり、多くの物について季節的所屬を明らかにするようになつた。俳諧にいたつて季節の觀察を十分になす下地は連歌ですでに育まれていた。

(四) 俳諧と季題

宗鑑や守武の俳諧も大体連歌の式目に従っている。貞門の人々によつて制作された俳諧作法書では季の問題が最も重要な問題として取扱われて居り、季に関する研究や約束は連歌よりも精細となり、煩わしくなつた。和歌より連歌に入つても季の題は殆んど増加してはいない。それが俳諧になるとうんと増加した。増加すると共に貞徳の油槽を開いて見てもわかるように、秋茄子、夏瘦のような今まで連歌には見られなかつた、俳句的季題が見られるようになつた。又秋待つは連歌では秋季であるのを、俳諧では待つという詞の実際から夏季としている。連歌では人事題は寂しいものであつたが俳諧では相当ふえている。四季の詞の研究書としては徳元の俳諧初学抄をはじめいくらかあるが最も精細で後世をも益したのは季吟の山の井であつた。

貞門の頃は季題は「侘てをれ七重のひざを八重桜」のように、文字の縁で八重桜という季の詞を用いている場合も少くない。しかし芭蕉時代になると「木のもとに汁も膾もさくら哉」のように文字の縁にすぎらないで季題それ自身を用いるようになつた。

芭蕉も題詠も時々行つてはいる。しかし芭蕉の時代に於ては題詠はそれほど盛んではなかつた。発句も貞門時代から盛んに作られているが、これは発句・脇・第三と連続すべき予想の下に生れた形式であつて、まだ十分独立性がなく、作者の創作心理から見ても和歌に対する十七字詩という觀念にまでは達していなかつた。これは芭蕉に於ても同じで発句はやはり連歌時代の面影をとどめ、その時に応じて季節のものを詠め、附句を予想するという風であつた。要するにこの頃までは発句は和歌的な独立をとげてはいなかつた。其故季は季の物・季の詞として意識されていた。

発句では季を尊重したが芭蕉にも無季の句はある。去來が「先師もたまたま無季の句有、しかれどもおし出して是をし給はず」と述べているように無季の句を特に作る事はしなかつた。旅寐論を見ても神祇・釈教・恋・名所等の句には季題を含まないものも許すべきであると考えていたようである。三冊子にも名所の句は無季でも差支えない。季を取り合わせ歌枕を用いると十七字ではまじめにくい事もあるからというのである。芭蕉の無季の句は十句余りある。しかしそうすぐれたものはない。またとりたてて強調する程の意義はないと思われる。

蕪村の時代になると発句は独立して句会に於ける題詠的競技の対象となり、兼題や即題をとりまぜて常に題の選定に苦心するようになった。こういう句の会に於ける題は季の題とは限つていなかった。しかし本格的な題は季の題であつた。それは発句で季を尊重するので自然に題としても季が重大な位置を占めるにいたつた為であろう。ここで季の題と季の詞とは合一したように見えるが事實はそう簡単なものではなかつた。季は季の詞であるから必ずしも主題的でなく、ただ季の物が入ればよいという風に自由に考えられもするし、又これは題詠の題であるから必ずしも実感に基礎をおかず、空想的に題の意を詠出すればよいという風にも考えられる傾向があり、どちらつかずになりがちであつた。

江戸時代の発句は本格的には当季のものを持つべきものと考えられ、この点では連歌の伝統を守るものであるが、その季が題であるか、題であるとすれば主題であるかどうかという点になると、発句の独立が著しくなつた結果、かなり連歌を離れて、和歌の主題主義に近づいていながらその態度は不徹底であつた。江戸末期には俳諧は墮落し、その弊は季の題や季の詞も無意味な作句の道具となつてしまつた。

(五) 子規の季題觀念

子規の俳句觀は作句の体験と俳諧史研究とから来ている。連句を非文学として排し、発句を独立の文学として俳句と称し、蕪村を称揚し客觀写生を唱えた。伝統の形骸と化した宗匠を中心とした旧派を排し、俳句革新をなしとげた彼の業績は大きかつた。

季の題と季の詞とが交錯し不明瞭になつていた発句を受けついだ子規は、俳句に於てこれをどう見ていたであろうか。「俳句には多く四季の題目を詠ず。四季の題目なきものを雑という」「俳句の題は普通に四季の景物を用う。然れども題は季の景物に限るべからず。季以外の雑題をとり季を結んでものすべし。兩者並び試みざれば終に狹隘を免れざらん」(俳諧大要)といつて季と題とを分けて意識し、雑題には季を結ぶべきであるとしている。季と題とを分けて考えているのは和歌・連歌以来の伝統を守つていたのであるが、子規では題の主要部分は季の題であり、また季語は多く題として取扱われたので、多くの場合季の題という形のものが問題とされている。

発句と季との結びつきは先に述べた蕪村先生の説のようであつたと思うが、それは必然的なものではなく、むしろ偶然に發したものであつた。しかし自然の美しい景色に恵まれ、四季の推移が規則正しいといつたような風土的特徴や、日本人が自然を愛好し、季節の推移に敏感であり、生活や行事を時候の移り変りと密接に関係させている民族性に根ざして發展した。さらに季語による連想が重んぜられたのであろうが、次第に形式的なものとなつてきていた。子規が季を重んじたのは、印象明瞭を主張し、時候の連想を重大視したからである。「蝶といへば翩々たる小羽虫の飛び去り飛び来る一個の小景を現すのみならず春暖漸く催し草木僅かに萌芽を放ち菜黄麦緑の間に三々五々子女の嬉遊するが如き光景をも連想せしむるなり。この連想ありて始めて十七字の天地に無限の趣味を生ず」「雑の句は四季の連想なきを以て其意味淺薄にして吟誦に堪えざるもの多し。唯雄壯高大

なるものに至りては必ずしも四季の変化を待たず。故に間々此種の雑の句を見る。古来作る所の雑の句極めて少きが中に過半は富士を詠じたるものなり。而してその吟誦すべきもの亦富士の句也」(俳諧大要)とのべている。又時間を人為的に限つて之に命名して題目となし、空間的にはなぜ制限しないかに就ても論じているが、季語の普通性を述べた聞くべき意見であると思うが割愛することにする。

子規は結局季を重視し、題を軽視する結果となつた。「藤花牡丹は春晩夏初を以て開く故に春晩夏初を以て季と為すべし必ずしも藤を春とし牡丹を夏とするの要なし」と自然に即こうとしながら「日の最も長きは夏至前後なり然れども俳句にては日永を春とすこれは理窟より出でずして感情に本づきたるの致す所なり斯く一定せし上は他季に混すべからず」と言い、やはり伝統に拘泥している。また主題的厳格さから解放されながら、なお題詠に執着していた。季と題とは元来は別のものであるが、季の題として子規の意識の中ではからみあつていた。一応区別しながら、その何れにも徹底し得なかつたのである。

秋桜子は「俳句の題はすべて季語である。一部分では季節に関係のない題を出し、それに季語を詠み入れるような事をしているがこれは古い習慣の名残で、もはや取上げて言う程の事もない」と述べて子規が季の題という形で問題としていたのを、更にこえている。子規以後については他の機会にゆずりたい。

(本稿を草するに当つて特に岡崎先生の論考に教えられる点の多かつた事を記して謝意を表する)

参 考 文 献

- | | | |
|----|--------------------------|------|
| 1 | 国文学に於ける季の起原(女身万葉) | 武田祐吉 |
| 2 | 古代文芸に於ける季節の表現(古代日本の文芸) | 岡崎義恵 |
| 3 | 季節感の展開(美の伝統) | 〃 |
| 4 | 季題の意味(〃) | 〃 |
| 5 | 俳諧の季についての史的考察(俳諧史の研究) | 額原退蔵 |
| 6 | 季題の範囲とその推移との考察(俳句講座 第三卷) | 松瀬青々 |
| 7 | 季感の研究 (〃) | 青木月斗 |
| 8 | 季題概論 (続俳句講座第三卷) | 藤井乙男 |
| 9 | 季題の変遷 (〃) | 宇田久 |
| 10 | 明治大正俳論史 (〃 第六卷) | 大森桐明 |
| | その他 | |